

## カラマツの枝打ちについて

問 現在，2 齡級から 6 齡級までのカラマツ林を所有しています。これらの林に無節の用材生産を目的として枝打ちを行いたいのですが，何年生頃どのように行うのがよいでしょうか。（栗山町，N 生）

答 用材生産のための枝打ちは，3.65m 長の無節材を何番玉まで採材するかによって枝打ち高が決まります。枝打ちはおよそ 4 m の整数倍の高さまで行いますが，一般に 4 m ないし 8 m までで，それ以上の高さの枝打ちは経費の面と作業の困難さから行われていないようです。枝打ちの回数は，4 m まででは裾枝払いを含めて 2 回，4 m から 8 m まででも 2 回に分けて打ち上げます。

枝打ちを開始する林齢は，樹冠が閉鎖しはじめる頃を目安としますが，生立本数や地位によって異なります。ご質問にあった 2 齡級の林分ではつる切り，除伐などの作業を実施する頃と思いますが，その時に合せて手の届く範囲の高さ（1.5 m ~ 2 m）まで裾枝を払うようにすればよいでしょう。この時の枝打ちではほぼ全木が対象となります。

2 回目の枝打ちで 4 m まで打ち上げます。枝打ち高は樹高の半分以下であれば，ほとんど生長に影響がないといわれています。林分平均樹高が 8 m 以上になった頃を一応の目安とし，力枝が 4 m を越えるようになってから打つとよいでしょう。地位の良いところでは，裾枝払いから 3 ~ 4 年後の 12 ~ 13 年生頃に初回の間伐が実行されますので，形質不良木などが除かれた間伐後に枝打ちを行うとよいでしょう。

8 m までの枝打ちは地位が良く，生長の良好な林分が対象となります。2 回目の間伐実行後，樹冠の回復をみて，遅くとも 20 年生頃までには打ち終わるようにします。枝打ちの対象木はあらかじめ決めた主伐候補木だけとするのがよいでしょう。

製材にしたときに無節の材面を多くとるためには若い林齢で枝打ちを行うこと，さらに，枝元を残さずにできるだけ幹に平行して切り口を平滑に打つことが大切です。また，あまり強度な枝打ちは生長の低下だけでなく，萌芽枝の発生をもまねきます。ですから，あまり強度でなく，枝元をできるだけ残さずに，しかも林縁木は枝打ちしないように留意すべきでしょう。

枝打ちは生長の休止している季節に行うのがよく，厳寒期を除いた秋か春先がよいでしょう。

枝打ちの道具はナタ，カマ，ノコギリなどがありますが，ナタはノコギリに比べて切り口が平滑になる反面熟練しないと幹に傷をつけやすい欠点があり，カマは細い枝が対象となります。ノコギリの使用が安全でしょう。（造林科 福地 稔）